

第110回 ほほえみ 開催

5月16日（水）第110回 ほほえみを開催しました。
8名の方が参加してくれました。

久しぶりに参加してくれた方がいましたが、元気な顔を見られるだけで、こちらも元気がもらえるのだと感じました。

次回のほほえみは、6/20（水）14時から16時まで
本館3階 特別会議室での開催となります



【がんサロン事務局】

『“産婦人科”に思うこと』

（がん体験記）

私は、「女性は子供を産むのは当たり前」だと思っていた。が、乳がんになったことで、出産をあきらめなければならなくなった。婦人科の病気ではなく、まさか乳がんの治療が原因で子どもが産めなくなるなんて、想像すらしていなかった。

乳がんの治療は、婦人科に様々な影響を及ぼすホルモン剤での治療だった。その中でも最大の影響は、“子宮体がんのリスクを高める”というもの。そのため、婦人科の定期的な検査は必須。半年ごとに婦人科にも通わなければならなくなった。

誰もが想像するように、産婦人科は、“赤ちゃんを産む病院”。そのため、お腹の大きな妊婦さんや小さなお子さん連れのお母さん、そして、妊娠していると思われる若い女性と一緒に旦那様らしき男性が寄り添いながら待合室に座っている。

そこはまるで、幸せの世界。子どもが産めなくなった乳がんの私が、そんな幸せいっぱい女性たちの横にいるのは、場違いでしかなかった。婦人科は、私にとっては“地獄”だった。

そして感じたのは、
「どうして、“産科”と“婦人科”は分かれていないのだろう」
ということだった。

今は診療科も細分化されている時代。なのに、“産婦人科”はそのままだ。

きっと、私と同じ思いを抱いている人は少なくないと思う。

完全に分けられないまでも、せめて待合室を仕切るなどの配慮を、これからの医療に期待したい。

（北海道／女性／乳がん／がん患者本人）